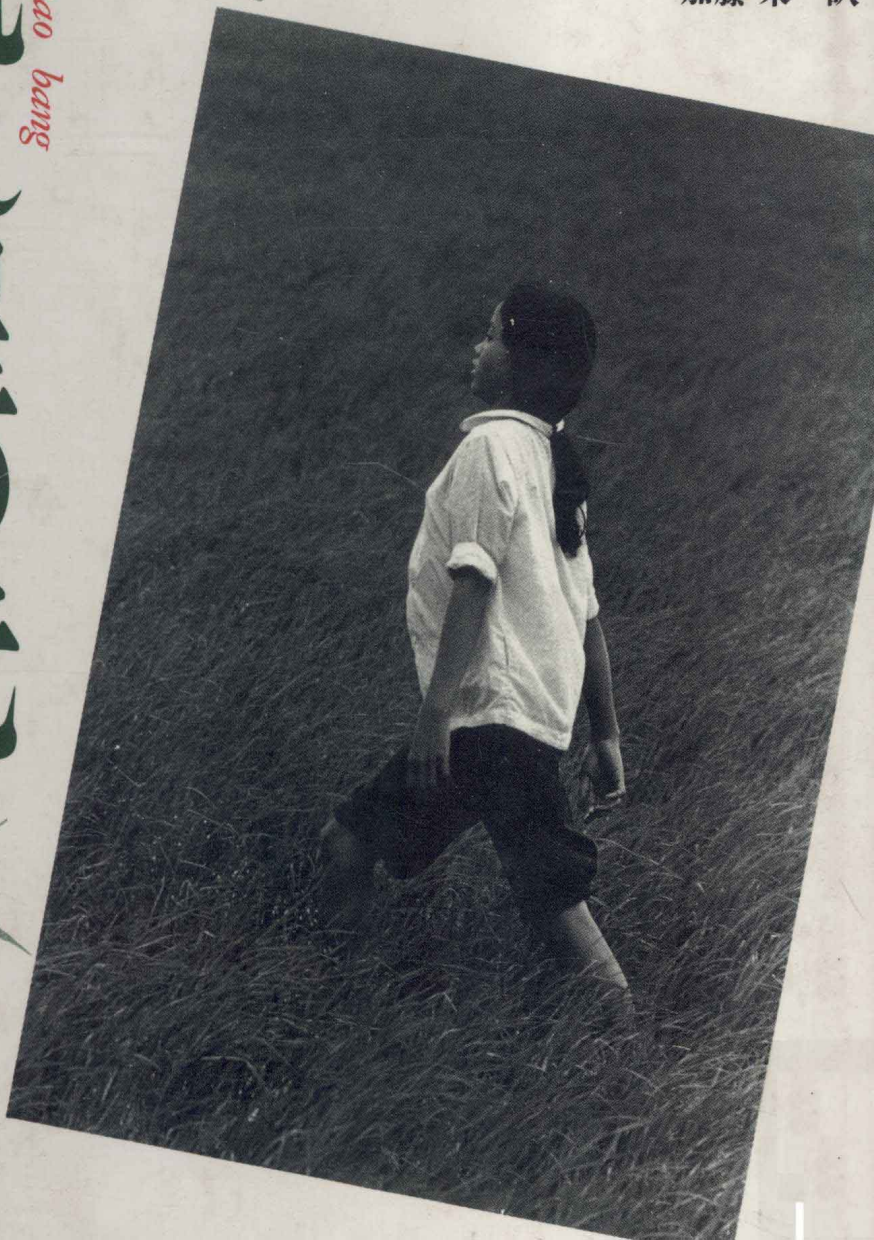


現代ベトナム短編集

ズオン・トゥー・フォン他＝著
加藤 栄＝訳

流れ星の光
Amb sao bang



ながれぼし
流れ星の光……現代ベトナム短編小説集

一九八八年二月一〇日 第一刷発行

著者——ズオン・トゥー・フォン他

訳者——加藤 栄

発行者——村山恒夫

発行所——新宿書房

東京千代田区九段南四一六一三—七〇二—〒一〇二

電話〓〇三〇二六三一—二六—〇 FAX〓〇三〇二六三一—二七三五

振替〓東京七—一—二四九七

造本——中垣信夫+島田 隆

印刷所——ミツワ印刷+(株)フクイン

製本所——松岳社青木製本所

定価——11400E

ISBN4-88008-119-1 C0097

現代ベトナム短編小説集

ズオン・トゥー・フォン他＝著

加藤 栄＝訳

*Amb
sao bang*

流れ星の光



《双書》アジアの村から町から

新宿書房

目次

Contents

流れ星の光

現代ベトナム短編小説集



ブンリーの花

Nhung bong ban ly

Duong Thu Huong

5

ミン

Hang
Nguyen Minh Chau

43

木蔭の物語

Cau chuyen doi tan la rop

Nguyen Thi Ngoc Tu

67

流れ星の光

Anh sao bang

Thieu Huan
チウ・フアン

119

ダン・ティ・コク・トゥー

Một chuyện sáu năm và sáu ngày

六年と六日の話

Trần Văn Tuấn

チャン・ヴァン・トゥアン

137

花の季節がやって来た

Mùa hoa đã đến

Cao Sơn

カオソン

161

父を待つ青年

Chàng trai ở bên đợi xe

Hồ Anh Thái

ホー・イン・タイ

179

委員長職権代理氏

Ông quyền trưởng ban

Nguyễn Quang Lộc

ダニ・クワン・ロック

197

訳註

215

解題

225

ベトナムの「新傾向」文学について

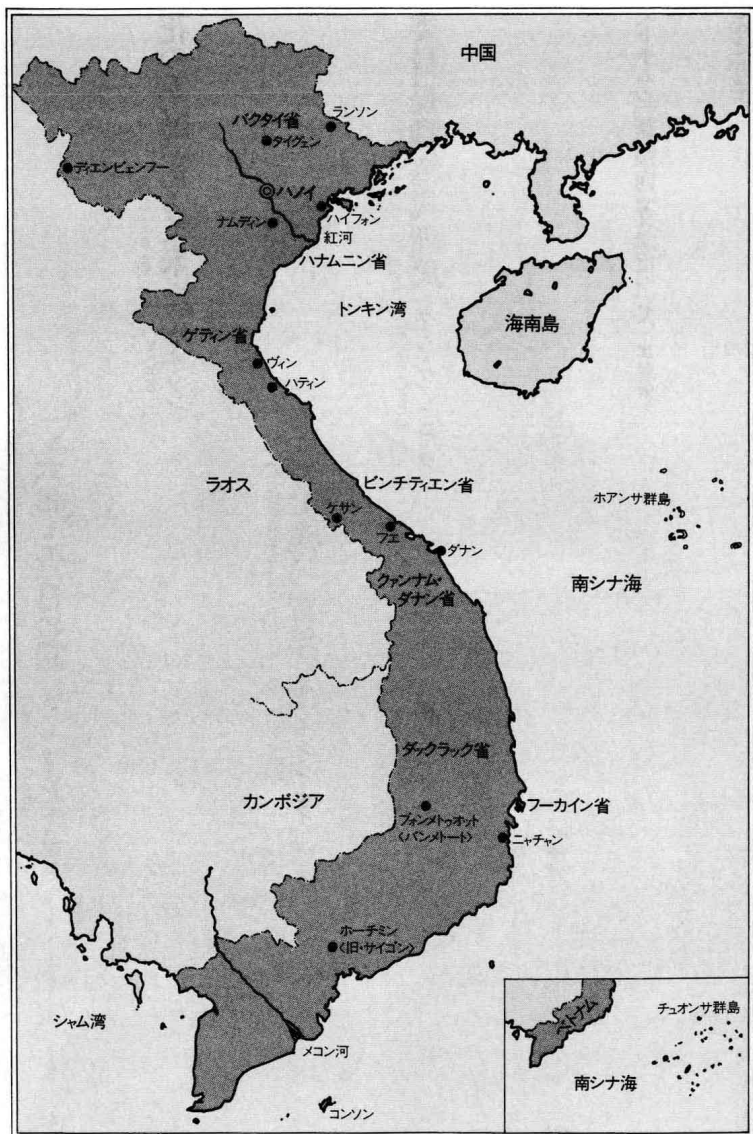
加藤栄

235

あとがき

272

写真集……大石秀野



ベトナム全図

Nhung bong ban ly
グン・リーの花



Duong Thu Huong
グン・トゥー・フン

春は他の季節とは違う顔を持っている。若々しくあどけない、それでいて何かを内に秘めた、人の心を魅きつける顔だ。塀沿いのちっぽけな草の繁みや、冬には干上がってしまうような小川のチヨロチヨロした流れも、春になると生氣に満ちた光を浴びて輝き、寒かった日々々の陰鬱を脱ぎすてる。

ガンにとって今年の春は、遠方への旅立ちによって始まった。ガンはこの旅を国が統一された日から予定していたが、今になってやっと実現することができたのだった。

うっすらと霧の立ちこめる朝まだき、いつもの汽車はガンをハノイへと運んだ。まるで獣のようにフーフー息をつき、石炭の塵の混じった白い蒸気を間隔をおいて吐き出す、埃まみれの汽車だ。車内に吹き込む細かい埃でガンの目は涙ぐんだが、彼女はそれを苦にもせず、外の景色を飽かず眺めていた。駅を出た汽車は、黄金色に輝く椰子の森へガンを運んで行った。日は昇り、深緑の山を背に、芽吹き出した椰子の葉が、きらめく数多の鏡のようにキラキラと輝いている。平野では紅色の河が穏やかに流れ、何艘もの帆船がまどろむようにゆったりと過ぎて行き、ガンを夢の世界に誘った。ハノイに着いたら、彼女はバスに乗り換える。それからそのバスで一路、中部に入る。そこでは青い波が道路際まで押し寄せ、存分に日差しを浴びた砂浜は雪のように輝き、黄昏時には鳥たちが群れをなしてさえずっているのだ。

ガンはほとんど眠らなかった。彼女は車窓に顔を押しつけ、走り過ぎて行く景色を黙って眺めていた。田畑、浜辺、ひたひたと波の打ち寄せる渡し船の船着き場、物売りの呼び声で喧噪をきわめる小都市……。

すべてがもの珍しく、胸が躍る。国道はもうもうとした埃と共に、もの凄く速さで後へ後へと飛んで

行く。タイヤは回る。バスの窓越しに人々の顔。夜だ。乗客は互いにもたれ合い、ぐったりとして眠る。ガンも無理をして目を閉じようとするが、どうしても眠れない。ルールーというエンジンの音が虚空に散る。アスファルトの路上に、車のライトがぼんやりとした光の尾を引いて行く。ヘッドライトがこわれているので、運転手は仕方なく車体の底のライトをつける。ちらちらする光の輪は、ちょうど戦争中の車底灯（ブンガム）のようだ。デコボコになった道路や、小石の突き出た砂利道を、小刻みに震えながら苦しげに這って行く光。

あの光、車底灯の光……ガンの恋人はやはりそんな晩に出征して行った。今晚と同じように月も星もない、風が止むことなく吹く晩だった。ギエムの背に負ったリュックから、擬装の木の葉がボサボサとつき出ていた。彼の最後の言葉が彼女の耳元で聞こえた。見たこともない獣のような一団のトラックが、丘の斜面を這うようにして続々と進んで行った。そして車底灯の光は徐々に遠くなってきた、夜の帳（よりの）の中に霞む蠟燭のように見えた。

バスは道路沿いの小都市で止まった。道の両側には食堂が二、三軒と、葉の疎らな若い火炎樹（2）の株があった。運転手とその助手の少年が、路上で日傘をさして売られている麺とビールを注文した。乗客たちは三々五々、飲みものと間食を求めてバスを降りた。ほとんどの者が飯屋に入った。彼らの中には北部に集結した南部の幹部や学生もあり、今、故郷に帰るところだった。彼らの顔や目には、故郷に帰れば幸福が待ちうけている者の喜びとときめきが漲（みなぎ）っていた。ただ一人ガンだけは、誰かに会えるという望みはまったくなかった。今回の旅で彼女の唯一の目的は、弟と昔の恋人の墓を故郷へ移すことだった。二人とも中部地方南方の高原地帯（4）で戦死したのだ。

ガンはバスから降りず、座席にすわったまま窓枠に頬杖をついていた。一群れの子供たちがワッと寄って来た。彼らは紙にくるんだ飴や菓子、氷入りのお茶を詰めたナイロン袋を下げていた。

「おばさん、ココナッツ入り餅、タピオカ菓子はいかが？」

「冷たい氷入りのお茶、一袋一ハオだよ。おばさん買ってよ」

「冷たい氷入りのお茶、おばさん買って……」

ガンは身がすくんだ。数人の子供たちが自分のことをおばさんと呼んでいる。一人の子供がガンに氷の袋を押しつけたので、彼女の手は冷たくしびれた。ガンはそっと手を引っこめた。まさか自分がそんなに老けてしまったなんて……知らず知らずガンは顔に手をやった。ガンの手は、道中の埃でザラザラになった肌に触れた。ガンの肌は昔からきめ細かくて、色白だ。しかし初めてのシミが、鼻筋の両脇と目尻の下にできたことも彼女は知っていた。きめ細かい肌であればあるほど、損なわれるのもまた早いのだ。

斜めに差しこむ午後二時の強い日差しに耐えきれず、ガンは窓辺に頭を寄せ、額に手をかざして日の光を避けた。

私はもう三十五歳だ。三十五歳。

本当なら、三十五歳にもなったら、人は人生について、苦しみについて、幸福についてきちんとした考えを持っていなければならない。三十五という年齢には、心待ちにして待つようなものは何もない。あるのはただきわめて現実的な、きわめて細々とした、ちょうど白昼に人の顔に眺め入る時のような興のさめた生活があるだけだ。三十五という年齢には……。それなのに自分ときたら、いまだに

十六歳の時のことをくよくよ思い出している……一筋の日の光が指の隙間から洩れ、ガンの顔にまっすぐ差しこんできた。彼女は目を閉じた。それと共に彼女をとりまく景色の輪郭は徐々に目の前から消えてゆき、赤い太陽の光の色だけが、キラキラと輝きを増していった。

十六歳。今から十九年も前のことだ。彼女が通りすぎた十六歳の草原。カウ川⁽⁶⁾の堤防べりの草原だ。キムリー草や狗尾草⁽⁷⁾の生い茂る、平坦な草原だ。虎尾草や竹節草⁽⁸⁾がたくさん生えていた。小高い丘の上にぼつんと一本立つカボック⁽⁹⁾の木が、時おり目にしみるような赤い花を落としていた。その頃のガンは十六歳の、土地で一番お転婆な女学生だった。昼間、ガンは風を揚げて遊んだ。ひらひらする三つの尾の付いた風は薄絹製で、竹の骨に貼ってあった。風が風を空へ押し上げると、長い尾ははたはたと空に伸び、人っ子一人いない静かな野原に風の骨がきしむような音を立てた。ガンが空を仰ぎながら、糸巻を繰って風糸をさらに遠く放つと、風はまるで白い鳥のように旋回した。そして風と赤い花びらの上には奥深い空が広がっていた。十六歳の時の高く抜けるような空、上からのしかかるようなその尽きせぬ青い色が、少女ガンの心の中に散っていった……。

運転手が運転席に上がった。顔も首筋も汗で黒光りがしている。彼はハンカチを出して汗を拭い、クラクション⁽¹⁰⁾を鳴らした。乗客は慌てて駆け戻り、押し合って乗車し、席についた。

道端でレキマ⁽¹⁰⁾の実を買っていた一人の男が、声もからがらに叫んだ。

「待ってくれ、待ってくれ！」

すでに席について、バスが出るのを今か今かと待っていた人々が皆、ガヤガヤと催促した。

「早く、早く！」

「やれやれ、まったくモタモタしやがって！」

運転手はもう一度、長くクラクションを鳴らした。ガンの隣に腰かけていた老婆がいまいましたに
眩くらいた。

「三十分も休みがあったのに、まだ買物がすまない」

男はなんとか最後の果物を選ぶと、財布を出して金を数え、支払った。男の手はぼっちゃりとして、指は短く丸みを帯び、爪が肉に食いこんでいた。ガンは彼の手が、夫のカンの手にそっくりだと思つた。不思議なくらいそっくりだった。

男の客はバスに乗りこみ、息をつきながら座席の間の通路を通過して席を探した。ガンの隣の老婆が大きな声で言つた。

「なんとまあ、卵を十個買いなざるのにまる一時間も選んでるなんて。男でもずい分と細かい人だったもんだ」

卵をいっばいに詰めこんだ帽子を手にしていた男の客は、それを聞いて振り返って笑つた。無邪気な微笑だった。ガンは彼を見て、腰が抜けそうなほど驚いた。身体がカッと熱くなつた。彼の顔立ちもカンと似ていたからだ。カンよりずっと年上で、顔も醜かったが、小さな顎にちらほらと髭の生えた、横幅のある顔。男はもう結構な年配で、皮膚はブヨブヨし、まぶたはたるんで袋状をなし、太い首には皺が深くたたまれていた。座席にかけると、彼は足元の旅行鞆にせつせと果物を詰めこんだ。ガンはその男から目をそらすことができなかった。その時、彼女の心に驚愕の念が走つた。

「夫が年をとつたらこんなふうになるんだわ。顔の皮はたるみ、性格はこんな風に細かくて！」ガン

の目の前にある男の両手は、皮膚がピンと張り、テカテカ脂光りがしていた。その時彼女は、これはまさしくカンの手だと思った。まだ会ったばかりなのに、昔からよく知っている手だった。

妻子のことを別にすれば、カンには夢中になっていることが二つあった。オートバイと鶏である。

オートバイは、南部へ仕事で行った親戚の者が八百⁽¹⁾ドンで買ったそのままの値で、彼に譲ってくれた。それは赤いホンダで、どこも故障していなかった。鶏の方はカンがはじめから育てたもので、彼がハノイまで行って卵を買い、教え子の父兄のアヒルに卵を抱かせて温めてもらったのだ。ちょうど勤め先の学校で校舎を建てる折、彼は頼みこんで竹と材木を買い取り、広々としてしっかりした鶏舎を建てた。鶏舎は茶色の二階建てで、油紙で葺いた屋根、エサを入れる樋、飲み水を引く筒、産卵のための床、鶏たちが運動するための止まり木まで備わっていた。カンの鶏は常時十五羽以上はいて、十羽ほどがメンドリだ。毎朝六時にカンは鶏舎へ卵を取りに行く。卵は彼の手で一つ一つ通しのナンバーが打たれ、ボロ布をつめた樋の中に納められる。午後、やはりびったり六時になると、カンはホンダの排気筒に磨きをかけるが、それだっていつも鏡みたいにピカピカだ。それが終わると、彼はグワーンとエンジンをかけ、そうしてはじめて安心して元の場所にしまう。それはまるで時計のよりに規則正しく、ホンダのエンジンがかかると、広場で遊んでいる団地の子供たちが、「カン先生のバイクのエンジンがかかったぞ。家へ帰ってご飯だ……」と声をあげるほどだった。

カンは趣味一本やりの人間だった。そしてただそれだけだった。彼の周囲には、もちろん鶏を飼ったり、殖^ふやしたり、金を貯めてオートバイや冷蔵庫をかう者は大勢いた。だが彼のようにその種のことを人生の目的としたり、その種のこのために、感情のすべてを抑制したりする者はほとんどいな

かった。

二人の間の亀裂は、ほとんど他愛のない話に端を発している。

一九七五年冬の、ある朝のことである。当時、南部が解放されて数カ月しか経っていなかった。人は皆、喜びと幸福に沸き立ち、期待と、そして不安な胸騒ぎに包まれていた。すべての家族という家族が、南部の土地に血肉の交じわりを持っていた。ガン個人について言えば、皆と同じ幸福の念、民族全体の大きな幸福を感じる一方、彼女は二つの悲報を同時に受け取った。たった一人の弟トゥンと、彼女の昔の恋人ギェムが戦死したのだ。二人とも長年戦場で戦い、バンメトートの高原で斃れたのだった。

何日も泣き続けたので、その日の朝、ガンは起きるのがいやだった。彼女は顎まですっぽり毛布をかぶり、横になったままぼんやり空を眺めていた。窓枠で四角く区切られた、白くどんよりした空が見えた。その色は冷え冷えするほど明るく、彼女は氷の冷たさにも似た、しびれるような感覚を覚えた。バン⁽¹³⁾の木のしなった枝から最後の赤い葉が落ちた。窓で四角く区切られた空を、もの悲しく乾いた風が吹いて行く。ガンは地表を這う葉の音をはっきりと聞いた。これまでに冬が何回、自分の人生を通り過ぎて行ったことか。

どの年の冬も、空の色は今日と同じ、ざわめく風も同じ。そして枯れた高いバンの木の枝から、赤い葉が音もなく落ちていくのも同じ。だがこの日曜日朝ほど、それを強烈に意識したことはなかった……。

……幼年時代の冬。雀たちは軒下の巢穴で茶色の羽をふくらませ、首を縮めて小さな嘴^{くちばし}を突き出

し、数珠玉のような目をばちくりさせていた。愛らしい彼女の弟トゥンが、歩道でボールを蹴っている。二色のゴムボールがガンの足に当たった。トゥンは笑い転げた。弟の頬は真っ赤だ。彼の頭には、ゆらゆら揺れる白いボンボンの付いた毛糸の帽子が載っている。ああ、ゆらゆら揺れるボンボンの付いた帽子よ……。

……それからまた別の年の冬。青春時代の冬。くすんだ鋼色のカウ川。その川の色は、もう流れることもなくじつと止まってしまったかのような色だ。橋は水面に、折れ曲がった黒い影を落としている。川の兩岸の大根畑には花が咲いている。あでやかな黄色の花は蝶の羽のようだ。竹節草が種を飛ばしている長い堤に、ギェムはやって来た。それはガンが彼と初めて会った日だ。ギェムのズボンには竹節草がびっしりとはりついている。彼が言った。

「君の故郷には、ずい分たくさん竹節草が生えているんだね。忘れようとしても、忘れられない草だ。とげが刺さると痛いし」

ギェムは笑った。歯がキラキラ輝いた。

ああ、忘れることなんてできやしない。燃えるように赤い竹節草よ。ギェムの目が輝きを帯びて笑っている。どこまでも続く堤を、彼はさっきと同じように歩いている。気高い姿、風になびく美しい黒髪……。

固く乾いた物音がした。扉が開いて壁にドンと当たった。カンが小さな卵の籠を手にして入って来た。ここ数日寒いので、きっと鶏の産む卵の数が減ったのだろう。カンが卵の籠をテーブルの上に置き、ひき出しを開けた。

「なあガン、今日は何日だったっけな？ ああ二十七日だ。十二月二十七日だった」

ガンは鉛筆で卵に一つ一つ、日付を記した。それが済むと、彼は奥に行つて木箱を出してきた。ガンは目で見なくても、夫が箱の中の卵の数を調べようとしているのがわかった。新しい卵を箱に納める前に、彼はそれをいつもの習慣にしているのだ。

「一つ、二つ、三つ……なあガン、お前昨日の午後、子供にいくつやった？」

「四つよ」

「五、六……それで昨日、テーさんはいくつ借りていった？」

「三つ！」

ガンはぶっきらぼうに答えた。彼女は憤懣を抑えて、夫の幅のある背中、手の平、背広の上着の固い襟元、それに刈り上げた首すじに目をやった……ガンはなぜか、ガンが急に自分とは疎遠になったような気がした。そして今になってはじめて、掛け値なしの彼の素顔を見たような気がした。ガンは自分がカンのような人間と、八年も一緒に暮らしてきたのに気づいて愕然とした。彼と八年暮らして、子供が三人……。

彼女が彼と結婚したのは、純粋な愛情のためではなかった。だがいずれにしても、以前だったら彼女は彼を大切にし、敬意を払っていた。その頃のガンの家庭生活は平穩に過ぎて行き、波風が立つようなことはなかった。その頃のガンのイメージは、彼女にとって必ずしも強烈な、形のはっきりしたものではなかったが、それでもとりたてて問題とするところのない、承服できるものだった。彼女は彼のことは深く考えず、また考えることがあったとしても、その考えはさほど危ういものではなかつ

た。

しかし国土が解放され、人々が皆、感情の大きな動揺の波の中に置かれるようになると、ガンにはやっと、カンの本当の姿が見えてきた。すぐそばで十年近くも一緒に暮らしてきたながら、彼女は今になってやっと彼という人間の内面を見抜いた。カンには自分のことしか考えられない人間だった。彼の小さな心臓は、彼自身のために打つのに充分な力しか持ちあわせていなかった。時代のありとあらゆる変化、民族全体の幸福、家族の喪失など、彼の心には何も響いてくるものがないようだった。彼の生活はピカピカに磨いた石のように平板で、どんな小さな塵すらもとどまる余地がなかった。

カンは相変わらず自分の仕事に熱中している。

「二十五、二十六……この卵は十二日からの分とごっちゃになっている……二十八、二十九……」

最後の卵を箱に納めると、カンは蓋をして物置きにしまった。彼は戸を閉め、手を洗い、それから湯呑みの水を切ってお茶を淹れて飲んだ。ガンの耳に瀬戸ものの湯呑みのカチャカチャぶつかり合う音が聞こえた。彼女は夫に尋ねた。

「私、今日、母さんのところへ行って、弟のトゥンの墓参りのことを話し合ってきますね!」

「うん」

「あなたも行きます?」

「そうだな……僕は今日ちょっと忙しい」

「タンさんも墓参りの休暇をとれないかしら。私一人じゃ心細いわ」

「うん!」